

中学校社会科歴史的分野における 日本と世界のつながりに着目した授業開発

所属コース 教科領域コース
氏名 矢野秀一
指導教員 森貴子 藤原一弘

【概要】

平成29年告示の学習指導要領によって、中学校社会科の学びは大きく変化することとなった。特に歴史的分野においては、日本の歴史の背景となる世界の歴史の学習がこれまでより一層重視されるようになった。だが、従来の教科書に基づく授業では、日本と世界のつながりが薄くなってしまおうという、これまでも指摘されていた課題は解決されない。さらに、中学校段階での世界史学習がこれまで以上に重要である理由が他にもある。つまり高校で歴史総合が始まることにより、前近代の世界史学習は、学校教育では中学校が最後になる可能性がある。そこで、前近代の世界史の知識を充実させつつ、それを日本の歴史の背景として学ぶ授業を構成することで前述の課題が克服できないか考えた。授業実践の結果、多くの生徒が日本と世界のつながりを意識することができるようになっていた。そのため、日本と世界の歴史をうまく接続することで課題が克服可能であることが分かった。

キーワード 日本と世界のつながり

1. はじめに

学習指導要領が改訂され、道徳の教科化や外国語教育の充実など、新たな変化が見られ、中学校社会科における学びも大きく変化した。これに対応する形で各出版社が発行している教科書の内容は10年前と比べ、ページ数や用語数などの増加が見られ、より一層中学生段階での学びの重要度が増していることが分かる。地理的分野では、地域調査やGISについて取り扱う場面が増加し、公民的分野では、これまで以上に現代社会に生きる自分を見つめ直すことができるようになっている。しかし、中学校社会科歴史的分野においては日本の歴史の背景となる世界の歴史の内容がプラスされたものの、これまでの教科書と同じように日本史との関連性が薄くぶつ切りの記述になっている部分が多くあるように思える。では、こうした問題を克服し、生徒たちに日本と世界の歴史の密接な関わりを認識させるためには、どのような工夫が必要だろうか。本研究では、こうした問題意識のもとで、日本史と世界史のつながりに着目した授業を開発することを目的とした。

2. 研究の目的及び方法（課題設定の背景）

中学校社会科歴史的分野は、日本の歴史が中心の構成になっており、教科書における前近代世界史の内容は比較的少ない。その中でも前近代の西洋史は教科書の記述はあるものの、日本史全体の流れと直接的な関わりが少なくなっているためか、教科書中에서도浮いた

存在になっている。そのため筆者がこれまで受けてきた授業は、近代以前から世界が関わり合うことで今日の社会が成立していることが意識しにくいものになっていると感じていた。

そのような中、平成29年に中学校学習指導要領が改訂された。原田（2018）によれば歴史的分野の内容は、①日本の歴史の背景となる世界史的内容の充実、②歴史を大観する学習の重視、③伝統、文化学習充実の側面から琉球・アイヌの文化に触れる、という3つの点で変化があったとされている。しかし、従来と同じように、独立して世界史的内容を取り扱っては、日本の歴史との関わりが薄い授業のままになってしまう。また、令和4年度より高等学校地理歴史科において日本史A、世界史Aが廃止され、歴史総合が新たにスタートする。この科目は近代以降の歴史にスポットを当てた新たな科目である。森・津田（2018）によれば、これまでの世界史Aがダイジェスト的に前近代を扱っていたのに対して、歴史総合は主に近代社会を取り扱ったものであり、前近代の記述は皆無である。そのため、来年度以降の高校生で世界史探究を履修しない生徒たちは、中学校で学んだ以上の世界史知識を身につける機会が失われ、そこから近世以降の日本と世界の繋がりについても、考察する機会が少なくなることが予想される、と述べている。また黨ら（2018）は、歴史総合の必修化により、中学校社会科歴史的分野という限られた時間の中で前近代西洋史、世界史をどのように教えるべきかを具体的な授業実践のレベルで考えるという非常に困難な課題を突き付けられている、と述べた上で、この問題はほとんどの学者や現場の教員に認識されていないと指摘している。加えて、これまでに筆者が受けて来た授業は先ほど述べてきたような日本と世界の歴史のつながりの薄い、ぶつ切りの授業であったため、日本と世界の繋がりが意識しにくいものとなっていた。このような現在の中学校社会科歴史的分野をめぐる諸問題、すなわち①日本と世界がそれぞれ独立して描写されることにより、両者のつながりが薄く感じられること、②高等学校で歴史総合の履修が開始されることにより、世界の歴史を学ぶ機会が減少すること、これらを克服するための授業開発及び実践が本研究の目的である。具体的には、前近代の日本の歴史の背景となる世界の歴史に関する授業を開発し実践することで、課題を解決する。

3. 授業範囲の設定

開発する授業の範囲は、今回の学習指導要領改訂で増えた内容を生かすことができ、歴史総合では学習する機会が減少すると考えられる前近代の歴史を取り扱いたいと考えた。しかし、増加した世界史的内容を網羅的に取り扱うのでは、日本と世界のつながりに直接的な関わりのない内容も存在するため、初めて日本とヨーロッパが出会った近世の授業を開発し実践することとした。その中でも特に日本に鉄砲及びキリスト教が伝来する時代の授業を行い、生徒に日本とヨーロッパが直接つながったことによる社会の変化と、ヨーロッパが日本に進出した背景を考えさせることで、「世界の中の日本」を意識させる授業を行うこととした。

まずは、該当範囲の学習指導要領の記述の確認と現行の教科書記述の分析を行い、どのような点が現状の問題点なのかを整理することとした。そこで見つかった課題答えうる授業を開発し実践を行った。

4. 現状の問題点の整理

4-1. 指導要領における取り扱い

平成29年告示の中学校学習指導要領解説では、「近世の日本」の内容の取り扱いで、「ヨーロッパ人来航の背景については、新航路の開拓を中心に取り扱い、その背景となる交易の状況やムスリム商人などの役割と世界の結びつきに気付かせること。」と明記している(105頁)。また、学習に際して、「豊かな交易が行われていたアジアにヨーロッパ諸国が進出する中で、世界の交易の空間的な広がりが生み出され、それを背景として日本とヨーロッパ諸国の接触がおこったことや日本の政治や文化に与えた影響などを考察できるようにする」とある(105頁)。

これらの文言から、近世におけるアジアとヨーロッパの関係をとり上げた歴史の授業では、特に新航路の開拓及びその原因となった世界の交易状況やムスリム商人の動きを生徒に捉えさせる必要があることが分かる。このことから、日本に影響を与えたヨーロッパ人が来航した背景を捉えさせる授業を開発する必要があると考察することができた。

4-2. 教科書における大航海時代前後の世界の交易状況の取り扱いとその課題

学習指導要領が改訂されたことを受け、本年度(2021年度)から中学校で使用される社会科歴史的分野の教科書においては、これまで以上に世界の歴史の学習する内容が増加している。では実際、教科書にはどのような記述があるのだろうか。今回は世界交易のあり方とその変化に関する記述に注目して、中学校社会科歴史的分野で本年度から実際に使用されている7社の教科書を分析した。

多くの教科書では記述量、ページ数に違いはあるものの、その内容に大きな違いは見られなかった(詳細は、報告書末尾に付した表3を参照されたい)。その中でも、現在松山市立中学校の2,3年生が使用している育鵬社の教科書では、日本の歴史が強調され、他の出版社の教科書では重要視されている世界に関連する内容や事項が薄くなっているように感じられた。他方で学び舎の教科書は海外の歴史について独自の記述が多くあり、倭寇との交易品の中には火縄銃に欠かせない硝石などの品々も含まれていたことなど、生徒にとって新たな発見となると思われる指摘が多くあった。また、教科書の内容に大きな違いが見られなかった残りの5社も大航海時代以前の内容をしっかりと記述しているものもあれば、大航海時代からの交易について大きな地図を掲載してより印象付けているなど、出版社によって強調したい部分は異なっていた。しかし共通点として、①日本にヨーロッパ人が鉄砲を持ってきたことは記述されているものの、日本に至るまでの理由が説明されておらず、ヨーロッパ人がなぜ、何を求めて日本にやってきたのかがはっきりしないという問題が見つかった。②また、後述するように、歴史研究の分野では、ヨーロッパが日本に来航した理由の一つとして日本産の銀の重要性が指摘されている。この点について、日本の16世紀の主要な輸出品が銀であったことは、どの教科書にも記述されていたが、それは今回の分析範囲とは離れて記述されている教科書が多く、ヨーロッパ人来航の背景としては捉えにくいと思われた。以上の考察結果を受けて、教科書では記述が不十分な、ヨーロッパ人によるアジア・日本への来航の背景を、先行研究を用いて考察することとした。

4-3. 先行研究での取り扱い

教科書分析で出て来た課題を解決するために、歴史学及び歴史教育の研究成果を検討す

ることとした。まずは、先述した共通点①日本にヨーロッパ人がやって来ることができたかについてである。教科書の記述では、中国船（倭寇）の船に乗ってやって来たという記述がなされていたが、ヨーロッパ人が倭寇とともにいた理由については明確な説明がなかった。

アブー＝ルコド（2001）によると、大航海時代以前の13世紀には図のような貿易ネットワークが世界各地に存在していた（図）スペインやポルトガルが航海に乗り出す15、16世紀以前は、ムスリム商人がそのネットワークを用いてヨーロッパにアジアの物産を届ける役割を担っていた。しかし、時代が進むにつれ、香辛料などのアジアの物産の需要が高まると、ヨーロッパの西端である

イベリア半島に位置する両国は自らアジアやアメリカ大陸へ乗り出した。特にポルトガルは、マカオに居住権を得て、東アジアの交易圏に参入するなどして莫大な利益を得ることに成功している。交易の商品に、ポルトガルが絹や陶磁器など明の製品を得ていたのに対して、明の欲しい商品は銀しかなかった。そこで目をつけられたのが日本である。16世紀の日本は世界でも有数の銀の産出国となっていた。ポルトガルはその銀に目をつけた

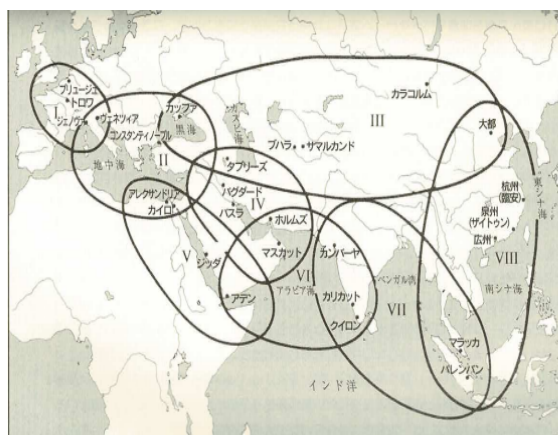


図1 13世紀の貿易ネットワーク

出典) ジャネット・L. アブー＝ルコド (2001) . ヨーロッパ覇権以前〈上〉 p. 43

のである。羽田（2007）によれば、日本から銀を仕入れ、それを明で生糸や陶磁器にかえ、さらにそれらを日本に持ち帰って高値で売るという日明間での貿易による巨額の利益は魅力的であったとしている。そのような中でポルトガルは明を中心に活動しながら、日本への航路情報が無い込むと倭寇の案内で日本に向かうことになった。すなわち、ポルトガルが日本に来た理由は、交易品としての銀を欲していたからなのである。この研究成果を用いることで、ヨーロッパが何を求めて日本へ来航したのかという課題も解決可能になると考えられる。

以上の先行研究での内容から、本研究の授業実践では、香辛料をはじめとするアジアにしか存在しない物品を手に入れるために海外進出を果たしたヨーロッパが、商品と交換するために必要な銀を求めたことによって、日本と出会ったことを意識させる授業とすることとした。その際、①大航海時代以前から世界各地に貿易ネットワークがあったこと。②そのネットワークを用いてヨーロッパ諸国は直接アジアやって来て交易を行うようになったこと。③当時の世界商品がアジアに偏った資源であったこと。④その世界商品の中でも中国の製品との取引には日本産の銀が重要な役割を担っており、それを求めてヨーロッパは日本へ来航したこと、を生徒に理解させることとした。

5. 授業実践

5-1. 授業実践の概要

本研究では、松山市立A中学校の第2学年2クラス（計73名）を対象に2021年12月23日に実践を行った。授業では、生徒にヨーロッパ人はなぜアジアや日本に進出したのかを

記述をさせ、それをもとに、生徒が授業のねらいを達成できているかを見とった。また、生徒へ本授業の感想の記入及びアンケートへ回答に協力してもらい、その記述及び回答から授業の改善点を探ることとした。なお、今回の授業は A 中学校 2 年生が 1 学期に学習を終えた範囲となっている。

○日時 2021 年 12 月 23 日 (木) 10:35~11:20 11:30~12:15

○場所 松山市立 A 中学校第 2 年学年 X 組 Y 組

○单元名 ヨーロッパとの出会い ヨーロッパ人の世界進出

○主題 ヨーロッパ人はなぜアジアに来たのだろうか。

○ねらい

・新航路の開拓とその背景となるアジア交易やイスラム商人の役割と世界の結びつきについて理解する。

・ヨーロッパの進出による交易の広がりによって日本が世界と直接つながったことを考察する。

○展開

学習活動	時間 (分)	学習内容	○指導の工夫 ◎評価 (評価方法)
1. 本時の学習課題を確認する。 (一斉)	3	○日本に初めて来たヨーロッパ人はいつ、どこから何のために来たのか。 ・ポルトガル ・スペイン ・貿易 ・キリスト教の布教 ◎学習課題 ヨーロッパ人はなぜアジアに来たのか貿易に着目して考えよう	○学習課題を確認し、本時の学習に見通しを持たせる。
2. 16 世紀までの世界の交易の人気商品を確認する (一斉)	10	○16 世紀の世界の人気商品は何だろうか、またその共通点は何か。 ・香辛料 ・藍などの染料 ・絹 ・絹織物 ・現在と比較すると自然からとれる産物が多い。 →アジアに生産地が偏っており、ヨーロッパでは取れない。ヨーロッパが商品を交換するには銀が必要だった。	○現代との比較を行い、当時の人気商品の特徴を捉えさせる。 ○当時の交易が、主として銀と香辛料の交換であったことに気付かせる。
3. 16 世紀までのヨーロッパの交易の状況から、アジアに進出した原因を考える。(一斉)	10	○16 世紀以前まで、ヨーロッパはどのようにアジアの商品を手に入れていたか。 ・16 世紀まではイスラム商人を通じて、人気商品を購入していた。 →イスラム商人を介して商品を	○16 世紀の地図を確認し、アジア進出の背景にイスラム帝国の存在があったことを理解させる。

<p>4. 日本の交易の状況を確認する。(一斉)</p>	<p>7</p>	<p>買っていたので高価で、確実に手に入れられるわけではなかったため、海を渡ってアジアへ進出する必要があった。</p> <p>○日本の当時の交易の状況はどうだっただろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本は 15 世紀初頭には明との勘合貿易を行っていた。 ・日本では、16 世紀に新しい銀の産出方法が伝わり、銀の産出が増えていた。 	<p>○東アジアの交易図を確認させ、ポルトガルが日本と中国の中継役だったことを捉えさせる。</p>
<p>5. ヨーロッパ人がアジア及び日本に進出した理由を考察しまとめる。 (小集団)</p>	<p>15</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ポルトガルが他のアジアとの交易のための商品として銀を求めていた。 ・ヨーロッパはイスラム商人から購入しており、アジアに香辛料や絹などのそこでしか手に入らない人気商品をより安く、確実に手に入れるためにやって来た。 ・16 世紀の日本は銀の産地となっており、人気商品交換のための品として銀を求めヨーロッパ人は日本に進出した。 	<p>◎ヨーロッパ人がアジアや日本に進出した理由を考え、まとめられているか。</p> <p>【思考・判断・表現、ワークシート・発表】</p>

学習活動2では、16世紀までの世界商品の希少性を理解させるために現代の商品との較を行った。そして、その商品がアジアに偏っていたため高価であったことと、その交換のためには銀が必要であったことを説明した(図2)。

学習活動3では、ヨーロッパ人がアジアへ進出した目的を理解させるために、大航海時代以前の交易システムに注目させた。ワークシートには、新航路発見前の交易のかたちの図を載せ、アジアの商品はイスラム商人から手に入れていたこと、その商品を直接手に入れるためにヨーロッパ人はアジアへ進出したことを気づかせた(図3)。

1 16世紀の世界的な人気商品は何か。

○それはどこで手に入っただろうか。現代の人気商品と比べて何が違う？

現在の人気商品



16世紀の人気商品



○16世紀の人気商品の共通点は何か。

16世紀の人気商品の共通点は



にしか

なかった！

○人気商品を交換するためには何が必要だった？

○16世紀までにヨーロッパはアジアの物産を手に入っていないか？入手していたとしたら

どのように入手していた？図を参考に考えてみよう！

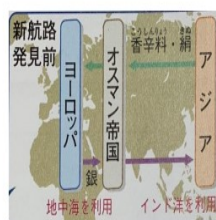


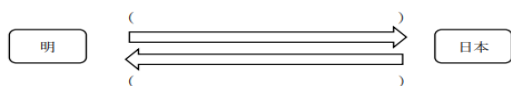
図2 授業用ワークシート抜粋(筆者作成) 図3 授業用ワークシート抜粋(筆者作成)

学習活動4では、日本の交易に目を向けさせるために15世紀の日本の交易(勘合貿易)について簡単に扱った。次にその交易の中にポルトガルが、中国との交易に必要な銀を狙

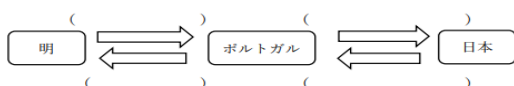
って日本へやってきたことを説明した（図4）。石見銀山の存在にも触れ、当時の日本は世界の中でも有数の銀の輸出国であったことにも言及した。そして授業の最後にヨーロッパ人が来航した背景をグループで考察させた（図5）。

2 日本とヨーロッパはなぜ出会うことになった？

○日本は15世紀にどんな貿易をしていた？
何を輸出入していただろうか？表から読み取ろう。



→16世紀になると勘合貿易は衰退、倭寇との密貿易が増えていく。
○ポルトガルは日本にほしいものはあった？



ポルトガルは日本の（ ）に注目！中国の商品と交換することで莫大な利益に

3 ヨーロッパ人がなぜアジア(日本)へ進出したのかまとめよう！



図4 授業用ワークシート抜粋（筆者作成） 図5 授業用ワークシート抜粋（筆者作成）

5-2. 授業中の工夫

本授業の中で様々な工夫を行った。一つ目は教材・教具面での工夫である。ワークシートへ地図を入れたことや、実物の香辛料（コショウ）を回すことで、生徒の興味・関心を高めようとした。生徒の感想には教材の工夫に言及するものもあり、本授業で使用した教材が生徒の授業意欲を高めたことが考えられる。二つ目は授業方法である。本来は考察部分のみグループワークを行う予定だった。しかし、1クラス目の序盤の発問であまり意見が出ず、2回目は授業冒頭から多様な意見を出したかったため、2時間目の授業では、自分で出した意見を席の近い生徒で話し合わせる場面があったが、その時間がもったいない、と感じたため、2クラス目の授業では授業冒頭からグループワークを行った。しかし、記述の面では大きな違いは見られず、結局1時間目と同じように考察までに時間がかかってしまい、生徒に意見を発表させる時間が無くなってしまった。しかし、生徒の感想を確認すると好評だったため、グループワーク自体は取り入れて正解だったと言える。今後は生徒の意見を生かせるようなグループワークの効果的な実施方法を考察していきたい。

5-3. 生徒の意見と評価の観点

設問：ヨーロッパ人がなぜアジア（日本）へ進出したかまとめよう。

●アジアへ進出した理由

- ・ヨーロッパでは取れないものを自分たちで手に入れるため。
- ・香辛料などを確実に手に入れるため。
- ・香辛料などを安く買えるため。
- ・アジアにしかない香辛料を求めてアジアへ進出した。
- ・ムスリム商人から買うよりも直接手に入れた方がよかったから。
- ・オスマン帝国を通すことでしかアジアの物産を手に入れることができず、高価であったため、直接アジアの国々と交易するために進出した。

アジアへ進出した理由の記述に関しては、上記のように「香辛料などを手に入れるため」

というような記述が多く見られた。しかし、その希少性について述べている生徒は多くは見られなかった。また、「ムスリム商人・オスマン帝国を通して購入していた」のような大航海時代以前の交易の様子まで記述している生徒も一定数いた。この設問の記述から、本授業を通して生徒は、アジアへ進出した理由は、「高価であった香辛料などの物産を直接手に入れるために進出した。」というような理解をすることができたと考えられる。

●日本へ進出した理由

- ・日本の銀を手に入れるため。
- ・交易品を手に入れるには銀が必要で、日本では大量に銀がとれるから目を付けた。
- ・銀を手に入れて、中国と交換して利益を得るため。

その一方で日本に進出した理由に関してなのだが、ほとんどの生徒が、「日本の銀を手に入れるため」というような記述ができていた。それに加えて、なぜ銀が必要だったのかまで記述している生徒も一定数おり、こちらの意図したことがしっかりと伝わっていたことが見て取れた。しかし、授業の時間が45分の短縮であったこともあり、日本へ進出した理由までしっかりと記述できていない生徒もおり、学習機会の確保などの点を配慮すべきであるとも感じた。

表1. 記述の評価の例

評価	評価の観点	具体例
A 評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパがアジアへ進出した理由を大航海時代以前と以後に分けて考えられており、交易品の偏在性も記述できている。 ・日本で大量に銀が産出されていたことに加えて、ヨーロッパが交易のためにその銀に着目したことについて記述できている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それまでオスマン帝国などのイスラム商人を経ることでしか入手することができなかったヨーロッパでは取れない香辛料などを求めてアジアへ進出した。 ・アジアでの交易には銀が必要だったため日本で大量に産出されていた銀に目をつけて日本にも来航することとなった。
B 評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパが香辛料を欲していたことを記述できている。 ・ヨーロッパが日本にある銀により利益を得ることを目的にしていたことを記述できている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパは香辛料などを直接手に入れたかったからアジアへ進出した。 ・日本の銀を手に入れ、利益を得るため。
C 評価	<ul style="list-style-type: none"> ・アジア及び日本との交易をすることが簡単に記述している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・貿易をするため。

生徒の意見に関しては、上記のような観点で評価を行うこととした。アジア進出の理由の A 評価はアジアにある香辛料などの商品を求めていたことだけでなく、その偏在性やムスリム商人の仲介手に入れていたという、過去との対比ができている生徒とした。B 評価は香辛料などの商品を手に入れたいという目的が記述できているかどうかで判断することとし、C 評価は単に貿易をするためだけといった具体的な商品名や直接手に入れたいといったような思惑が記述できていない生徒が該当した。

日本進出の理由の A 評価は日本で銀が産出されていたことに加えて、その銀を交易で利用するために目をつけたことが記述できているかで評価することとした。B 評価は日本で銀が産出されており、それを手に入れることを目的としていたことが記述できているかで判断することとした。C 評価は銀を手に入れるという目的が記述できていないものとした。

前述の生徒の意見を確認すると、アジア進出の理由・アジア進出の理由ともに B 評価の生徒が多かった。一方で C 評価はほとんどおらず、生徒の多くが一定の理解を得られたと考えられる。A 評価は各クラスに一定数おり、感想と見比べてみるとその生徒が班活動を引っぱり、授業を有意義にしたものと考えられることができる。

5-4. 生徒アンケート・感想

表2. 生徒アンケート、感想の結果

	4 とてもわかった	3 わかった	2 あまりわからなかった	1 わからなかった
問1 ヨーロッパがアジアへ来たかった理由がわかったか。	X組 32人 Y組 32人 計 64人	X組 5人 Y組 4人 計 9人	X組 0人 Y組 0人 計 0人	X組 0人 Y組 0人 計 0人
問2 日本と世界がつながったことが具体的に分かったか。	X組 28人 Y組 31人 計 59人	X組 7人 Y組 5人 計 12人	X組 2人 Y組 0人 計 2人	X組 0人 Y組 0人 計 0人
感想・意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパやアジアの関係が資料からよくわかりました。オスマン帝国を中継点にしていることや、銀を使っていることなどいろいろな背景が見えて面白かったです。 ・ヨーロッパがアジアへ進出したのは香辛料を直接手に入れるため、日本に来たのは銀を手に入れたからだと分かりました。 ・ヨーロッパ人と日本の関係を深く学ぶことができました。日本へは貿易をするための銀を手に入れることができるということが分かりました。 			

生徒のアンケートの結果を見てみると、とてもわかった、わかったと回答した生徒は問1、問2 どちらの設問でも多くを占めていた。このことから、多くの生徒が本授業のねらいを達成できたのではないかと考えられる。しかし、問2に関してはあまりわからないと回答した生徒も両クラスに一定数いた。そのため、ヨーロッパがなぜアジアへ進出したのかということについては理解することができていたとしても、ヨーロッパが東アジアの交易ネットワークに入り込み、日本とも交易を行うことで世界が1つに結びついた、ということに関しては、理解が不十分な生徒がいることが分かる。また、意見や感想に関しては、授業内容に関する肯定的な記述がほとんどを占めていた。中には、いつもと違った視点で歴史を見ることができた、という意見もあり、貿易という1つの側面から日本と世界の関係性を考える本授業の目的を達成できていると考えられる。生徒は過去に今回の授業範囲を学習したことがあるにもかかわらず、このような意見が出てきたことは本研究にとって意味のあるものであった。

6. 今後の課題

本研究では、教科書記述の問題点について考察し、その問題点を克服するような授業を開発した。“ヨーロッパが”という主語を用いながら取り扱ったのは主にポルトガルだけであった。本来であれば、スペインがアメリカ大陸に上陸し植民地経営を行ったことや、

ルネサンス、宗教改革についての取り扱いも必要になる。加えて、当時の東アジアの貿易情勢や日本の勘合貿易について復習として取り上げる必要があると授業を通して感じた。しかし、前近代のヨーロッパの内容に時間を取ることに限られているため、上述の項目のすべてを取りあげようとする時間が足りなくなるジレンマも生じた。そして、ポルトガルが従来の交易システムに飽き足らず、アジアへ直接進出した理由として、ヨーロッパ内部に存在した構造上の問題を取り扱うことができなかった。本来であれば、東方貿易におけるイタリア商人の独占的位置づけなど、ヨーロッパ内部での交易をめぐる事情を扱う必要があると痛感した。

今後は、教師が生徒にとって重要だと思う歴史のポイントにスポットを当てた授業を作成していけるように日々の授業研究を怠らず、教科書の記述、最新の研究動向など確認していき、中学校社会科の教師として成長していきたい。

引用・参考文献

- ・秋田茂・荒川正晴・栗原麻子・坂尻彰宏・桃木至朗（2014）. 市民のための世界史 大阪大学歴史教育研究会編 大阪大学出版会
- ・ジャネット・L. アブー＝ルコド, 佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹（訳）（2001）. ヨーロッパ覇権以前〈上〉岩波書店
- ・伊川健二（2016）. ポルトガル人はなぜ種子島に上陸したのか 大阪大学歴史教育研究会（編）グローバルヒストリーと戦争 大阪大学出版会 247-269.
- ・加藤陽子・倉本一宏・五味文彦・桜井英治・佐々木恵介・佐藤信・設楽博己・白石太一郎・高埜利彦・鳥海靖・藤田覚・本郷和人・山形真理子, 佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鳥海靖（編）（2008）. 詳説日本史研究改訂版 山川出版
- ・黨武彦・藤瀬泰司・小田修平・小鉢泰平・相良眞由・山本圭佑（2019）. 中学校歴史教育における世界史的視点からの授業開発 熊本大学教育実践研究, 36, 173-180.
- ・羽田正（2007）. 興亡の世界史 15 東インド会社とアジアの海 108-142 講談社
- ・原田智仁（2018）. 中学校新学習指導要領社会の授業づくり 明治図書
- ・日高智彦（2012）. 鉄砲を伝えたのは誰か 鳥山孟郎・松本通孝（編）歴史的思考力を伸ばす授業づくり 青木書店 6-13.
- ・森悠人・津田拓郎（2020）. 中学校歴史教科書における中世とルネサンスの扱いについて, 史流, 47, 63-86.
- ・文部科学省（2018）. 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編 東洋館出版社

検討資料（分析した教科書）

- ・育鵬社（2021）. [最新] 新しい日本の歴史
- ・教育出版（2021）. 中学社会 歴史 未来をひらく
- ・帝国書院（2021）. 社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き
- ・東京書籍（2021）. 新しい社会 歴史
- ・日本文教出版（2021）. 中学社会 歴史的分野
- ・学び舎（2021）. とともに学ぶ人間の歴史 中学社会歴史的分野
- ・山川出版（2021）. 中学歴史 日本と世界